

## 2021 年度前・後期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—社会イノベーション学部—

学部長 遠藤 健哉

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目について、2021 年度に実施された授業改善アンケートの結果全体に対してコメントを述べたい。

2021 年度授業は、COVID-19 の感染状況を十分に見極めながら、学生及び教職員の健康の確保を最優先するという方針のもとで進められた。具体的には、「受講者数が多い講義形式の授業科目については、遠隔授業の方法（原則として主にオンデマンド方式）により、また、演習・ゼミ、語学、実習などの授業科目については、面接（対面）授業の方法によりそれぞれ実施<sup>1</sup>」された<sup>2</sup>。その結果として、実際の授業は、遠隔授業（リアルタイム型、オンデマンド型）、面接（対面）授業に加え、遠隔授業と面接（対面）授業とを組み合わせたハイフレックス授業など、多様な授業方式で実施されることになった。こうした多様な授業実施方式を許容する体制の継続を踏まえ、2021 年度授業改善アンケートは 2020 年度調査の内容を踏襲し、学生によるアンケートの回答についても web での入力という方法を継続した。

授業改善アンケートの集計結果をみると、2021 年度授業は、概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたと考えられる。その理由として主に 3 つの点を指摘することができよう。

第一に、13 の質問項目（これらの中には履修者の授業への参画や事前・事後学習の状況に関するものも含まれる）のうち 12 もの質問項目で、5 点尺度において全体の平均値が 4 点以上（「とてもそう思う」、「そう思う」の合計）となっていることである。4 点以上となった項目数は、2020 年度前期調査結果の 6 項目、同年度後期の 11 項目から増加している。

第二の理由として、質問項目 1 「円滑に授業を受けることができた」への得点が平均値で 4.41 と高かった点を取り上げることができる。この回答結果は、学生諸君の受講に大きな混乱がなかったことをうかがわせるものである。また、当該平均値は、2020 年度前期調査結果の 4.18 点、同年度後期の 4.36 点から上昇している。学生諸君は、前年度の経験からの学びを通じ、多様な方式で実施された授業により柔軟に対応しえたものと推察される。

授業全般に対する評価を問う項目としての 11 「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」が 平均値で 4.26 点と高い値を示していることが第三の理由である。本項目は、昨年度前期アンケート結果の 3.97 点（平均値）、後期アンケート結果の 4.22 点から上昇している。遠隔授業と面接（対面）授業の両立に腐心してきた我々教員ひとり一人に

---

<sup>1</sup> 「2021 年度の授業実施方針について」（2021 年 1 月 17 日）

<https://www.seijo.ac.jp/students/inner-info/jtmo42000000w879.html>

<sup>2</sup> ただし、2021 年度後期開講より 9 月 30 日までの間は、緊急事態宣言下にあったため全授業科目を遠隔で実施した。

とって安堵できる結果であるともいえよう。

次に、授業に対する学生および教職員の取り組みに関する質問項目に着目してみたい。項目2「この授業の内容を理解するために努力した」、項目3「教員は毎回の授業ごとに十分な指示を行っていた」の集計結果をみると、今年度の平均値は前者で4.37点、後方で4.36点となっており、いずれも2020年度の同項目の平均値より上昇している。当該結果は、学生・教員ともに必ずしも十分とはいえない授業環境の中で前向きに取り組んだ努力を反映したものと解釈できる。

さらに、項目8「教員との双方向のやりとり（質問への回答や課題の返却等）が十分にあった」の平均値は4.11点であり、それぞれ3.68点（前期）、3.97点（後期）と相対的に低い数値を示していた昨年度調査に比べて向上している。遠隔授業やハイフレックス授業中心であった昨年度は、対面（面接）授業に比べて受講者とのコミュニケーションが容易ではなく、授業内での双方向のやり取りに苦労があったことをうかがわせる結果といえよう。

一方、項目13「1回の授業にあたり、授業時間と事前・事後学習のために費やした時間を合わせた平均の時間」に対する回答は、「2時間未満」が約62%であった。講義時間（90分）を勘案すると授業時間外の学習時間は30分未満であり、今後、事前・事後の学習をさらに促していくことが必要であろう。

集計結果には、項目11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」と他の項目との相関係数( $r$ )も示されている。項目11は、履修者各人の視点からの授業全体に対する総合的評価であるとみなすことができるため、相関分析の結果に着目することは重要であろう。その内容を見ると、授業全体に対する総合的評価は、授業を通じて学生自身が興味や関心を得られたことと強く相関<sup>3</sup>していることはもとより、学生がより良く理解できるように授業を適切に実施することとも比較的強く相関<sup>4</sup>していることが示されている。引き続き、教員は授業の適切な実施に向けて努力を維持していくことが望まれる。

また、本アンケートでは、「授業で用いられた授業手法」と「授業を通じて身についた資質・能力」についての質問も設けられている。「授業で用いられた授業手法」については、「課題（レポート等）」が75.7%とかなり高い。これは本年、COVID-19対応で期末試験行なった授業が少なかったことが影響していると思われる。それ以外にも「グループワーク（28.0%）」、「質疑応答（26.2%）」、「学生によるコメントペーパー（23.9%）」など多様な授業手法が採用されている状況が示唆されている。「授業を通じて身についた資質・能力」については、その分野の知識・学力のみならず、論理的思考力、言語運用能力、コミュニケー

---

<sup>3</sup> 項目11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と項目10「この分野への興味・関心が引き起こされた」との相関 ( $r=0.77$ )。

<sup>4</sup> 項目11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と、項目12「教員の授業資料は見やすかった」との相関 ( $r=0.67$ )、項目4「教員の指示は明確でわかりやすかった」との相関 ( $r=0.66$ )、項目3「教員は毎回の授業ごとに十分な指示を行っていた」との相関 ( $r=0.64$ )。

ション能力など多様な資質・能力の涵養につながっていることがうかがわれる。

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目を大学全体の授業科目と比較した場合、「授業で用いられた授業手法」や「授業を通じて身についた資質・能力」として回答された全体的傾向は類似しているが、大学全体よりは回答割合が高い項目が少なからずある。このことから、《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目の特徴として位置づけるに際し、さらに精査していく必要があるものと考えられる。

最後に、本学生授業改善アンケートは、実施必須科目の 77.6%、実施任意科目の 63.5%で実施された。また、延べ回答者数に対する各項目における有効回答数は約 94.6%であり、授業に参加していた学生全体の評価を十分に反映した結果であるものと判断できる。ただし、延べ履修者数に対する延べ回答者数は、19.9%にとどまった。本アンケートの回答が講義配布方式から web 入力方式に変更されたことが少なからず影響したとみられる。2022 年度は、一部の授業科目を除き対面（面接）授業に移行するなかで、告知方法や質問項目を工夫するなど、学生の回答率の向上と授業状況のよりの確な把握に努めることが肝要となろう。

以上